



TITLE:

北米旅行記(6)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 北米旅行記(6). 天界 1934, 14(155): 193-196

ISSUE DATE:

1934-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165488>

RIGHT:

北 米 旅 行 記 (6)

山 本 一 清

(26)

1933年七月10日午後2時、Burns 氏宅を辭し、電車で一旦 Hotel へ歸り、それから又市内の散歩に出かけた。市の南部 Monongahela 河に架した Smithfield 街の橋を渡り、それから“インクライン”といふのに始めて乗つて見て Washington Height の上から全市の盛んな景色を眺めた。次で再び別のインクラインから兩河の合流點に近い Point 橋畔に下り、Penn 街を経て歸宿。

(27)

七月11日朝7時25分、Pittsburgh 發、Pennsylvania 鐵道線により、11時30分に Columbus 着。直ぐ Cleveland 方面行きの列車に乗り換へ、12時36分に目ざす Delaware 町に到着した。廣い田園中の小さい大學町で、殊に夏休み中だから、誠に淋しい。

取りあへず、驛前の一小亭で午餐をすまし、それから道を聞きタタダウントアウンに行き、更に「天文臺へ」と尋ねつつ雨行する。たまたま電車が來たので、飛び乗り、車掌に聞きつつ天文臺前で下車した。——なるほど、電車に乗つてよかつたと、後に氣についた。天文臺はダウントアウンから可なり離れた郊外で、始めから歩いたら、30分以上もかつたかも知れない

此の天文臺は、例により、寄附者の名をとつて “Perkins

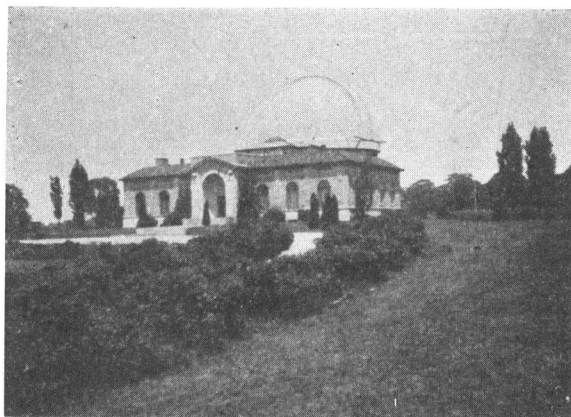


パーキンス天文臺の遠景

Observatory”と呼ぶ、此の Ohio-Wesleyan 大學の之の物理學教授 Perkins 氏の遺産により、最近に建てられたもので、二年前までは C. C. Crump 教授が主任者であつた。此の Crump 氏は1923年のカタリナ島の日食觀測地で自分と御なじみになつた人で（天界第36號第13頁，同第39號第130頁），更に昭和三年十月には世界漫遊の途中、我が國へも來訪されたことがある。（天界第93號第60頁）今年も Chicago や Yerkes 天文臺で度々面會した。一昨年此の Crump 氏は Yerkes 天文臺へ移られ、其の後任として、Harvard 大學から H. T. Stetson 博士が來任せられた。口径175糎の大反射鏡が昨年頃漸く完成し、Yerkes 天文臺と協同しつつ、最近年から Moffitt 氏作の分光器で恒星の分光觀測をやり始めたといふ新進の天文臺である。（天界第144號第150頁，及び同第151號第37頁）。

餘りに氣持ち良く、好い眺めなので、天文臺中心の遠近の景を二つ三つ撮影し、それから門をたたいた。しかし突然のことで、Stetson 臺長は不在、次席の N. T. Bobrovnikoff 氏も昨日あたり旅に出られたといふ。止むなく一研究女性の案内で内部の各室を參觀し、其の後 A, B 兩氏等に會つて、いろいろ觀測上の話など聞いた。あとで知つた所では B氏は今朝 Columbus 驛へ自分を出迎へに行つて呉れたのだが、互ひに顔を知らないのので、遂に出會はなかつたのだといふ。

17時、B 氏と研究女性と同道で、三人が Columbus 市にまでドライヴし、夕食を饗せられた後、自分は19時00分發の列車で次きの豫定地 Cincinnati 市



パーキンス天文臺

へ向け出發した。

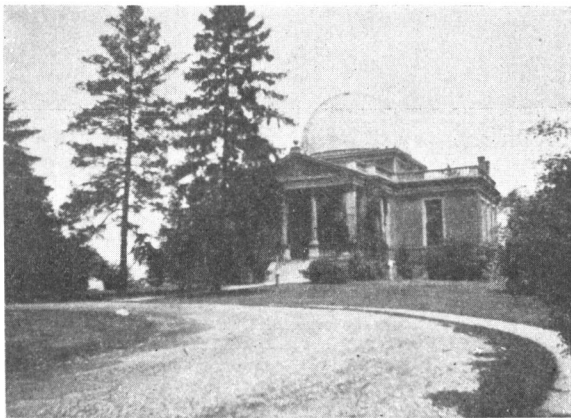
22時Cincinnati 着。着いて見ると、之れは今春落成したばかりの Union Station で、未だ如何なる旅行案内書にも記されてゐない最新の停車場である。總建築費が幾百萬ドルとか言

ひ、全く世界第一の壯麗完備な停車場である。しかし、入口を一步外へ出て見ると、此所は全くの淋しい郊外みたいな廣場で、ダウンタウンの sky-scrapers が非常な遠距離に見えてゐる。しかも之れが自分にとっては初めての土地なので、少し歩き出して見たけれど、とても遠く、又、途中が暗くて物騒なので、遂に途中から電車を拾ひ、23時頃、市街の中心地にある Fountain Square Hotel にとまることに定め、室を取つた後、又、バスで停車場へ荷物を取りに出かけた。すつかり用事がすんで、宿にねむつたのは23時半であつた！

（ 28 ）

Cincinnati 市は大きく、きれいな市街で、又、自分には、不思議な因縁から中學時代以來、特に其の名に親んでゐる市である。七月12日、朝可なり早く起き、Fountain Square の一レストランで食事をすました後、市役所の近傍からバスに乗り、天文臺を訪ねた。

此の天文臺は1899年から1906年まで、水澤や Carloforte あたりで始めた國際緯度變化觀測に、進んで參加した天文臺であるが、世界大戰の前から其れを止め、主として恒星の固有運動の研究と其の觀

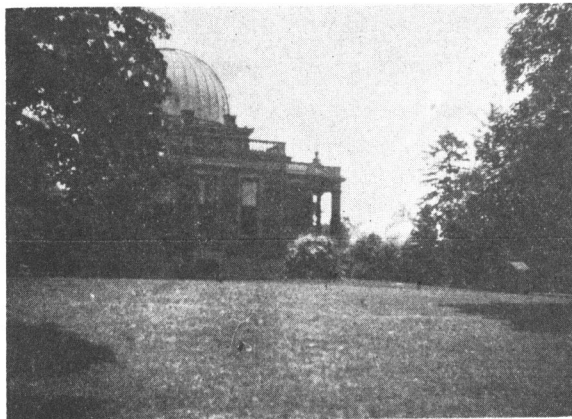


シンシナチ天文臺の本館

測及び目錄作製に専心してゐる。昨年 Porter 臺長が死んで、今尚ほ後任の定まらない有様であるが、とにかく、學風といひ、設備や建築といひ、極めて地味な、落ちついた天文臺である。

自分が12日の朝10時頃、天文臺の玄関を叩いた時、幸ひに主任 Yowell 氏に迎えられた。自分が以前に水澤にゐたことがあるので、名を知つて呉れてゐたらしく、緯度變化の話など久しぶりで少時を費した後、ドームや子午線室など、それから故 Porter 臺長の遺した固有運動の研究文書などを見せられ

た。此の天文臺では今後やはり子午環で恒星位置の観測をやる心算であると聞かれさて、實着な研究プログラムに、むしろ、驚いた。屋外に出て見ると、二十年前までやつてゐた緯度観測の石の臺が未だ遺されてゐる。昨日見た Delaware の天文臺と比べて見て、非常な違いである。今日のアメリカにも尚ほこうした天文臺が存在するのかと、しみじみ考へさせられた——いろいろ



シンシナチ天文臺の別館

の意味に於いて。

正午頃になつたので、招かれて Yowell 氏宅で食事を頂き、其れから見送られて又例の美しい停車場にたどり着き、14時30分發の列車で、Chicago への歸路つく。

車中に日は暮れて、20時05分、Chicago の Union 停車場着。二週間ぶりに、大博覽會の賑はひのいよいよ盛んなシカゴの市中に吐き出され、バスに乗り、それから又 イリノイ中央線に乗り換へて、東36街の J. Y. M. C. I. に歸りついた時は、Summer Time の10時近くであつた。（未完）

南の海より

出發の際は態々御見送被下恐縮仕候

波荒く候へども無事明日夕刻には目的地に到着の豫定に御座候遙かに御健康祈申上候

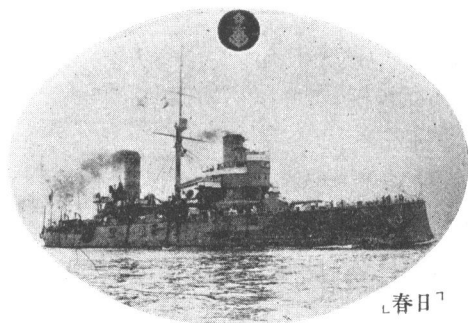
『月影の漸く満つる頃ほいに

椰子の木蔭に酒汲まむ我は』

一月廿六日

荒木俊馬

山本英子様



「春日」